

# エンカウンター (ENCOUNTER)

第256号

2023年8月1日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「ガラテヤ人への手紙講解説教」より (1)

## ガラテヤ書を書いた理由

パウロはご存知の通り、生粋のユダヤ人であり、しかも、パリサイ主義の最も厳格なる伝統を守る人でありました。小さな時から厳格な家庭に育ちまして、ユダヤ宗教のチャンピオンと言ってもよい位の人でありました。彼はタルソに生まれました。タルソはご承知のように、当時の地中海文明における学問の中心地であります。タルソ大学は当時、世界的な大学であり、そこでパウロは学びました。実に、異邦のユダヤ人以外の学問、ギリシャの学問についても十二分に理解する事が出来たのであります。即ち、幸いなことに、この両者の文明をかみこなした人と言えます。そして、彼は初めキリスト教を迫害致しましたが、ダマスコ途上において、復活のキリストに逢い、そして転向してキリストの福音というものを宣伝し始めました。

このパウロの述べた福音というものは、ユダヤ教にあっては、実に革命的な

ものでありました。即ち、ヨハネが、「律法はモーセによって伝わり、恵みはイエス・キリストによって伝わった」と言いましたが、この「恵による信仰によって救われる」ということでもあります。律法によって救われるという旧約に対して、神の恵みであるイエス・キリストを信じることによって救われるという画期的な教義を宣伝しました。このことについては、ロマ書及びコリント前後書で詳しく学んだところであります。

## ガラテヤ書が無かったなら

ガラテヤの人は大体異邦人でした。そうですから、比較的素直にパウロの福音を受け入れたようであります。しかし、彼らに対してユダヤ教の信者は、パウロは使徒でない、使徒とはイエスが選んだ 12 使徒及び彼らによって選ばれた人々を言う、パウロはそのどれにも属していない、パウロは 12 使徒を真似たにすぎない、従ってパウロの言う「信仰だけで救われる」というのは間違いである、と言いました。やはり割礼を受け、律法を守り、それを行なう必要がある、と主張しました。即ち、信仰プラス律法によって救われると言いました。これは、パウロの主張と食い違っておりました。このユダヤ人によるパウロの使徒職の否認によって、パウロの信仰を不明確となし、また、信者にも動揺が現れて来ました。そこで、パウロはこのガラテヤ書を書いたのであります。そして、自分が使徒であること、かつまた、自分の教え「信仰によって義とされる」という教えを鮮明にしました。

ユダヤ教の理解とパウロの理解とは違いましたが、もし、このガラテヤ書がなかったならば、キリスト教というものは、非常に変わった形となったと思われます。即ち、ユダヤ教の一宗派、分派として留まったでありましょう。あるいは、ユダヤ教と合併したような形を呈したであろうと学者は言っております。

## 「信仰の自由」、「人格の自由」、「キリスト者の自由」

以上のように、ガラテヤ書は、過ちを正すためにパウロが書きましたので、やや戦闘的であります。そして、活気と力とに満ちています。私は、全6章のどこをたたいてみても、ガラテヤ書の一つの目的が響いているように思います。即ち「信仰の自由」、「人格の自由」、「キリスト者の自由」が根底をなしております。パウロはそのためにこの書簡を書きました。何でも一つのものに徹頭徹尾集中しているということは驚くべきことであります。我々の人生に力がなく、熱もないのは、色々の目的を持ちすぎているために常にハラハラしているからであります。本当に、朝から晩まで、一つのこと集中出来たなら、人生に非常な力が出て来ます。

この書簡とロマ書とを比較してみますと、ロマ書は、同じ教義を説明するのに、初めての人びとに対して説いていますので、説明的であります。人間的に智慧を用いて説明しているために、どうしてもだらだらしているような傾向にあります。しかし、ガラテヤ書は、「信仰によって救われる」という一つの点、中心的な事実のみを捕えて、それに対して説明しております。これは、人間的な説明というよりも、実に霊的な説明であります。もしもロマ書だけでしたら、ロマ書の後半には道德の問題が出て来ますので、あるいは、人が救われるためには、信仰プラス道德・律法という思想に終わるかもれません。ロマ書を無理に解釈すれば、この二つが必要であることとなります。

## ガラテヤ書の中心的思想「キリスト者の自由」

我々が信ずるという場合、大体3種類に分けられます。

第1は、キリストを手本として、キリストの生き方、人生生活を学んでいこうとする信仰理解です。誰でもその時期があります。

第2は、キリストは手本ではない救い主である。従って、そのキリストを信じることが大事であると。これが救いに入る道であると。そしてこの信じることと、キリストの生活を真似すること、この二つが救いの条件であるとするものであります。

第3は、キリストが我らに代わってすべての事をして下さった。贖われた。我らはそのキリストの贖いだけで充分である、我々はそれを信じて救われるのであるという理解であります。

もしガラテヤ書が無ければ、ロマ書を詳しく学んだ者でも、この第2の理解で終わるかもしれないと思います。ガラテヤ書によって、人は自分の行ないによって救われるのではないことが明確となります。徹頭徹尾キリストを信じることだけで救われる、ということがはっきり書いてあります。これがガラテヤ書の中心的思想「キリスト者の自由」であります。…本当の自由とは、我々は天国に行くという永遠の生命を頂いているのであるから、何をしてもよい、というところにあります。そこから、神の御旨に従うという人格の自由が生まれます。これが、ルッターの言う「キリスト者の自由」であります。

## ガラテヤ書は、ロマ書を補う書として欠くべからざる書

〔ガラテヤ書の〕もう一つの特徴は、福音を明らかにしていることでもあります。福音というものは、人間が努力して、聖書を勉強して、その力で分かるものではない、と言う。他の学問は勉強して分かります。福音は、神の恵みとして、イエスが十字架にかかり、我々の罪とがを贖って、神の子となして下さる、ということでもあります。これは人間の知恵を絶していることがはっきり書かれています。パウロは、これは、自分の努力でもなく、人から聞いたものでもなく、神からの啓示によると言いました。キリストの方から授かる賜物であります。

ガラテヤ書は、第1章、第2章で、自分は神からこの福音を受けたこと、自分は使徒であること、福音の権威について述べています。

第3章、第4章で、「信仰によって義とせられること」について述べています。

第5章、第6章では、その自由の教えが、人間生活にどのように現れるかについて説明しています。この説明は、パウロがロマ書第12章、第13章でふれた道徳に関する宣べ方とは違います。ガラテヤ書では、聖霊を受けて、永遠の生命を受けて、自由に生きる、ということがはっきり出ています。「聖霊の結ぶ実は、即ち平安、云々」とはっきり出て来ます。正に、ロマ書を補う書として欠くべからざる書であると思います。ロマ書だけでは不十分です。

## 黒崎幸吉訳ルッター「ガラテヤ書註解」内村鑑三先生の序文

ルッターの有名な「ガラテヤ書註解」について、黒崎幸吉先輩が大正10年に訳されたものがあります。その書物に内村鑑三先生の序文が載っておりますので、紹介します。ガラテヤ書とはどういうものであるかが分かります。

### ○黒崎幸吉訳ルッター「ガラテヤ書註解」内村鑑三先生の序文〔部分〕

「パウロのガラテヤ書を最も深く味わったものは、マルチン・ルーテルである。パウロを知らんとすれば、ルーテルによらざるべからず。我が友、黒崎幸吉君に、この訳書ありし理由はここに存するのである。君も余もパウロ信者であって、又ある意味では、ルーテル教信者である。我らは、ルーテルを世に紹介して、自分自身を語りつつあるのである。ルーテルではない、自分である。彼が、我が言わんとするところを最も明白に、かつ最も有力に言ふてくれたのである。故に、我に代わって言ふてもらふたのである。訳書と言えば訳書である。しかしながら、無関係の訳書ではない。自分の著書に代わるための訳書である。キリストはわが主であり、パウロは我が師であり、ルーテルは我が兄である。我らは、長兄ルーテルをもって、我が信仰を証明せんとする者である。（一）クリスチャンとは、キリストではないのですよ。キリストに属する者です。キリストはクリスチャンではありません。救い主です。ここを混同してはなりません。クリスチャンはパウロをもって始まりました。一）パウロのガラテヤ書！ 懐かしき書よ。

内村鑑三著「一日一生」10月30日

「キリストは我らの義であり、聖であり、贖いである。わが道徳であり、宗教であり、救いである。キリストにありて、神に対してわがなすべき事はすべてなされたのである。われらはわが不義のこのまま、キリストを信じて、神の義（ただ）しき者として、彼の前に立つことができるのである。我は我が汚れのこのまま、キリストを信じて、神の聖き者として彼の前に立つことができるのである。われはいまだ救われたる者にあらずといえども、キリストを信じて、すでに救われたる者として、神に取り扱わるるものである。完全なる救いは神より出でて、信仰によりわがものとなるのである。これユダヤ人にはつまづくもの、ギリシア人には愚かなるものである。されども召されたる者には最大の真理、最高の哲学である。」

これがガラテヤ書の内容であります。

## キリスト教の元祖は、パウロ

本当にこの書簡〔ガラテヤ書〕が分かった時に、我々は自由となって、牧師は牧師として、家長は家長として、奴隷は奴隷としてやる、とルッターは言っています。天から雨が下るように、我々はこの永遠の生命をもって、この世において、人を潤すことができると言っているのです。これを「キリスト者の自由」という。

このまえ、ダニエル書を学びましたが、その最後の部は、この復活を目当てにあなた方の己が道を行きなさい、という言葉で結ばれていました。ダニエル書では、牧師になれなどとは言っておりません。ルッターもまた、ここで伝道師になれとは言っておりません。

最後に私が付け加えたいのは、キリストとクリスチャンとは違うということです。最初のクリスチャンはパウロです。ヨハネでも、ペテロでも良い。しかし、最も明確に説明したのはパウロです。仏教で法然上人と言えば、念仏を信じて、それを最も明確に説明した人です。宗教ではこれを元祖と呼びます。そういう意味で、キリスト教の元祖はパウロです。我々は、元祖のパウロの話を聞かずに、直接イエスに行ってキリストが分かるはずがありません。キリストをどのように信じるかが問題です。

## ガラテヤ教会の位置

〔ガラテヤ書の〕受信者のガラテヤ教会は、どの教会かについて、北方か南方かと、学者の間で多くの議論がありますが、どちらとも決め難い。北方とすれば、彼の第2回目の伝道の時に建てられた教会でありますし、南方とすれば、第1回目の伝道の教会に当たります。いずれにせよ、パウロの信仰から離れていた者もあり、引き継いでいる者もいたと思われませんが、ガラテヤの教会の全体の信者に対して、パウロには、彼らが真の信者になって欲しいという願望がありました。

## パウロの重点は「復活」

福音の内容は、私たちの罪のためにイエスは自分自身を十字架の上に捧げたということであり、我々を罪の結果から救うためであり、そして、彼は復活したという。これはパウロやペテロのためだけではありません。我々すべての人のためであり、……

要するに、自分では自覚はしないが、我々は悪の支配下にある。肉の支配、我欲の支配の中にあります。ルッターによれば、サタンの世界の中にいます。その悪の世界から救い出されて、自由にされて、永遠の国、即ち、来るべき国に入れられるためであると。この世と来るべき世を対象としています。これはキリスト教の特徴であります。来るべき世は、この在世のうちに始まっています。即ち、罪赦されて永遠の生命である福音を信じて、赦される。その完成は、キリストが再臨された時であるという。その時にイエスが復活したと同じように、我々も復活するという。パウロの重点は「復活」というところにあります。霊的のように、見えないものではありません。パウロに言わせれば上等な肉として復活するという。福音の目的は永遠の国に入ることであります。これは神の恵みであると言っています。イエスは、十字架につけられ、つらい思いをされたが、神の御旨に従われました。これは、人間側の研究、努力と関係なく、ひとえに神の賜物であります。

私は、パウロ、ルッター、内村鑑三を先生とする

パウロは、人々に源泉を持たず、人を媒介としていないと言いました。私は、神とキリストと聖霊を源泉・根源としていますが、媒介として内村鑑三をあげたいと思います。私は、パウロ、ルッター、内村鑑三のこの3人の先生を先生とし、黒崎幸吉、金沢常雄を先輩とし、そして友人として石館守三一人をもって、私は満足します。私は、この教会において、一人も福音を信じる人が出なくても、私は満足です。「偉大なる生涯」という映画は、紀元2000年を目当てとして制作されたと聞いていますが、私の福音も紀元2000年において時期を待ちたいと思います。